

英語基礎力の習得

中島 直樹

1. はじめに

平成15年4月、城西大学女子短期大学部において英語力調査（プレースメント・テスト）が実施され、外国人留学生を除く59名の女子短期大学部新生が受験した（経営情報実務学科47名：現代文化学科12名）。近年、短大を取り巻く環境が変化し、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。学生の英語力にも多様化の現象が見られ、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかを教員サイドがあらかじめ認識しておくことがより必要になった。また、その調査結果を基に、一年次の英語の必修科目であるプラクティカル・イングリッシュとカレント・イングリッシュを能力別のクラス編成にして、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図ろうというねらいで、数年前から新生全員に対して実施されている。

本論は、本年度学生の英語力調査の結果を、昨年度あるいはそれ以前の学生のそれと比較することにより、本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討し、本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。

2. 前年度およびそれ以前の結果について

まずはじめに、前年度（平成14年度）の英語力調査を振り返ってみたい。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は一時間、全50問で100点満点の試験であった。前々回の調査（平成13年度）とは試験問題が違うため、その年度の新生とは単純には比較することはできない。受験できなかった学生もいたが、新生生のほとんどにあたる93名が一斉に受験した。全体の平均点は約56.9点であった。学科別の受験者数と平均点は表1の通りである。

表1 平成14年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67名	約57.8点
現代文化	26名	約54.7点
全 体	93名	約56.9点

前年度（平成14年度）より、それ以前と比べ少しやさしい試験問題を新たに作成し、採用した。年々、学生の英語基礎力が低下し、平均点が30点台に低迷するようになり、試験としては難しすぎると判断したためであった。それ以前との単純比較はできなくなるが、これにより学生の英語力の差が鮮明に表れるはずである。

平成12年度には文学科に英米文学専攻があったためか経営学科よりも文学科の平均点の方が高かった。この傾向は平成13年度にも続き、経営情報実務学科約35.3点、現代文化学科約36.0点（旧問題）と僅かに現代文化学科の平均点の方が高かった。しかし、昨年度は経営情報実務学科の平均点の方が高い結果となった。このことは実際に授業を担当していても感じられることであるが、それが数字の上にも表れた結果になった。

平成13年度の傾向は、基礎力に不安のある中間層が今まで以上に膨れ上がったことであった。できる学生の層もできない学生の層もあったが、かなり多くの学生が20点後半から40点前半（旧問題）に集中してしまっていて、この中間層の動向がはっきりとはつかめなかった。昨年の英語力調査ではそのことを踏まえ、出題問題をやさしくし、平均点が60点を超えるような問題を作成することを心がけた。そうすることによって、それまで中間層とされてきた領域がどのような広がりを見せるかということをより正確に把握することができた。

昨年の得点分布を見てみると、13年度のそれよりもかなり大きな広がりを持っていることが分かる。90点以上のかなり基礎力のある学生が6名、次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名、その中間の30点から74点までの層が中間層であろう。しかし、よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があることが分かる。60点から74点までの上位の層（26名）と45点から59点までの中位の層（24名）と30点から44点までの下位の層（20名）とにおおよそ分類できよう。この3つの層が昨年度の女子短期大学部新入生に占める割合は実に75パーセントを超えていた。

3. 今年度の結果について

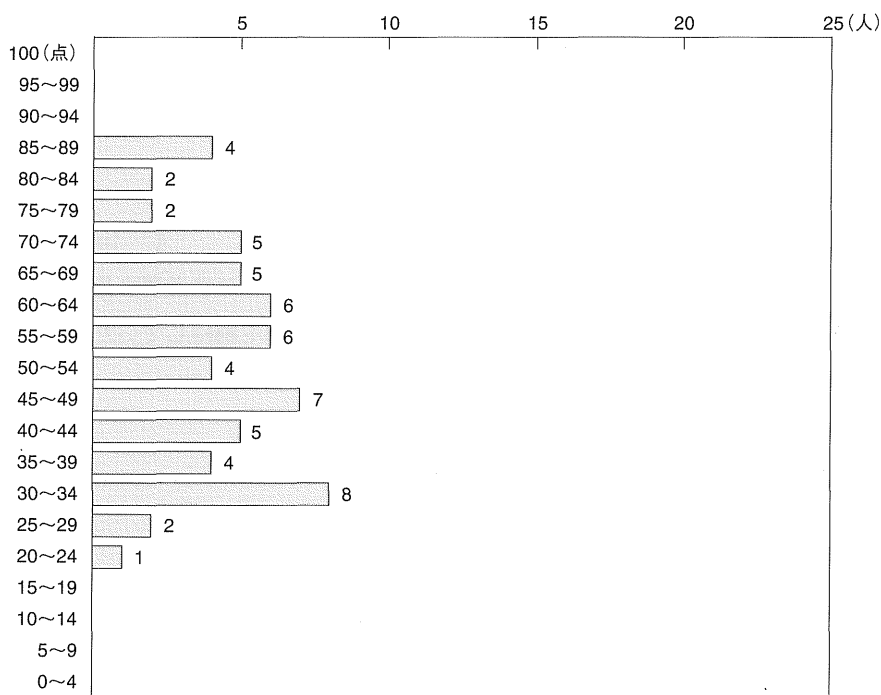
今年度も昨年度と同様に、出題形式は全問マークシート方式、試験時間は一時間、全50問で100点満点の試験（昨年と同一問題）とした。外国人留学生を除く59名の新入生全員が一斉に受験し、全体の平均点は約54.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表2の通りである。

表2 平成15年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	47名	約55.0点
現代文化	12名	約52.6点
全 体	59名	約54.5点

昨年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては2.8点、現代文化学科においては2.1点、全体では2.4点下がっている。短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していることを如実に示している。残念ながらこの傾向はデータを採りはじめた平成12年度からずっと続いている。また、昨年度は、その前の年度と違い、経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高かったが、この傾向も今後しばらく続いていくことが予想される。

次に、全体の得点の分布を見てみることにする。100点を5点刻みに分け、それぞれの得点層に何人の学生が分布しているのかを表したのが次のグラフである。



今年度の学生の得点分布はこのようになっているが、今回のこのグラフには今年度入学生の英語力の特徴が表れているように思える。受験者数の減少のため、グラフの形にある程度の変化は見られるが、基本的には昨年度とそれほど変わってはいないと思われるかもしれない。だが、昨年度と違う点は、90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった（昨年度は6名）

ことと、中間層とされてきた領域の形が逆転したことである。30点から74点までの層を中間層とした場合、そこにはいくつかの山があることが昨年度の検証で分かった。そして、昨年度は60点から74点までの上位の層に26名、45点から59点までの中位の層に24名、30点から44点までの下位の層に20名の学生がいて、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、今年度は上位の層に16名、中位の層に17名、下位の層に17名と、中下位に比重が移ってきており、そのことが昨年と比べて平均点を下げている最大の理由となっている。

4. 問題の検証

次に、実際に出題された問題を検討し、正解率の高かった問題や低かった問題等について特に気づいた点を検証していきたい。

まず、最も正解率の高かった問題は2番の

(2) A : Excuse me. Can you tell me the way to the post office?

B : Sure. () straight down the street. It's on the right.

1. Break 2. Catch 3. Go 4. Put

であり、正解率は86.8%であった。選択肢1, 2を選んだ数はほぼ同数であった。

2番目に正解率の高かった問題は1番の

(1) A : Do you know what language is () in Mexico?

B : Yes. It's Spanish.

1. thrown 2. lent 3. spoken 4. told

であり、正解率は83.6%であった。1番も2番も短大で勉学を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題し、90%を大幅に超える正解率を期待していたので、この結果には残念であった。この2題の正解率は昨年とほぼ同じである。

1番と2番の他に正解率が80%を超えた問題は以下の2題である。

(37) A : I'm sorry to be late. The bus didn't come on time this morning.

B : ()

1. This afternoon. 2. Don't worry.
3. Yes, you can. 4. No, I didn't.

正解率は83.6%であった。最近の学生はこのような会話形式の問題には慣れているようである。

(10) A : I don't know () Central Park is.

B : It's not far. I'll show you.

1. who 2. when 3. where 4. whose

81.9%の正解率であった。不正解者の多くが2を選んでいて、Central Park そのものを知らないであろう。

4 番は昨年度の正解率は81.7%であったが、今年度は73.7%に下がってしまった。

(4) There are many () of food from all over the world in this store.

1. chances 2. jobs 3. trips 4. kinds

不正解者の多くが3を選んでいて、4人に1人以上が kind の意味を知らないことになる。

(42) どこでそんなに素敵なコートを見つけたのですか。

Where (① a ② you ③ did ④ such ⑤ find ⑥ nice) coat?

1. ⑥⑤_ 2. ①④_ 3. ②④_ 4. ③⑤_

これも疑問文の基本的な形であるが正解率は75.4%にとどまった。昨年度の正解率は80.6%であった。

反対に、最も正解率の低かった問題は18番の

(18) If it () tomorrow, I'll probably stay home and read.

1. rainy 2. rains 3. raining 4. to rain

であり、正解率は19.6%と低かった。不正解者は1と3に大きく分かれた。主語 it の後ろに直接形容詞をつなげたり、be 動詞がないのに～ing 形を続けたりする基礎力不足が目立つ。

次に正解率の低かった問題は26番の

(26) Be kind () old people on the train.

1. at 2. to 3. of 4. from

であり、正解率は21.3%であった。68.8%もの学生が選択肢3の of を選んでいた。毎年、同じところを同じように間違っている。

英語基礎力を試すために出題した8番であったが、これも21.3%の正解率であった。

(8) Mr. Harada went to Kenya () pictures of African animals.

1. takes 2. took 3. taken 4. to take

不定詞の基本的な使い方を理解している学生は5人に1人強しかいないという信じられない結果が明らかになっている。選択肢1, 2, 3を選んだ学生はだいたい均等に分散している。

同様に基礎力を試すために6番の出題をした。

(6) A: This is a report () I wrote in Japanese yesterday.

Could you check it for me, Jiro?

B: OK, Laura.

1. which 2. when 3. who 4. whose

関係代名詞を習得しているかを問う基本的な問題であるが、正解率は半分にも満たなかった。3人に1人が2の when を選んでいた。yesterday という言葉に引きずられたのであろうか。

1 番から35 番までは基本的な文法・語法、36 番から40 番までは会話、41 番から50 番までは日常的な作文の力を見る出題をした。文法・語法については基礎力に不安を感じたが、対話の問題や

日常的な言い回しをやさしい英語で並べかえる問題は全体的に良い結果であった。このことは昨年とほとんど変わっていない。これも今の学生のひとつの傾向であろうか。

5. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。前回の調査でもはっきりしたことであるが、本学の特徴は基礎力のある学生とほとんど基礎力のない学生との中間の学生が非常に多いということである。そしてその中間のレベルの学生群は昨年同様だいたい3つの層から成っていることも今回分かった。しかし、その層は昨年度と形を変え、どの層にもほぼ均等に学生が存在するという台形的な形を呈している。つまり、最上位と最下位を除くあらゆる層にほぼ同数の学生が存在しているのである。このことが今年度の大きな特徴であろう。また、もうひとつの特徴として、90点以上のかなり基礎力のある学生がいなくなってしまうが、あと一息でそのレベルに到達できる学生の層は依然として残っているので、この層を守り、短大入学後に何とか鍛え上げ、英語力をつけさせることが大切だと痛感している。

今年度も、基礎力のあるクラスから順にA, B1, B2, B3, Cと分け、能力別クラス編成で授業を行い、教育的効果を上げられたと思う。実際の授業ではTOEICのスコアアップに目標を置き、TOEIC式の問題を扱ったものを教科書に採用した。また、本学で年2回TOEIC Bridgeを実施し、そのスコアを成績にも反映させた。また、昨年度に導入したマルチメディア教材を活用した授業に加えて、今年度は正規の授業以外に特別クラスを作り、Internet Navigwareというネットワークを利用した英語学習ソフトを使って学生を指導しているところであるが、これについては別に議論していきたいと思う。